

【絵画】

1. しほんぼくがごぶしんかんちしやうだいしほん紙本墨画五部心観（智証大師本） 一巻 建久五年禪覚書写の奥書あり

区分：重要文化財（昭和9年1月30日指定）

種別：図像

法量：縦30.0cm

時代：鎌倉時代 建久5年（1194）

五部心観は、天台僧智証大師円珍（814～891）が唐に渡り大中9年（855）に長安・青龍寺の法全から授けられた善無畏系の金剛界曼荼羅に関する図像で、請来原本2巻は滋賀・園城寺に所蔵され国宝に指定される（昭和28年3月31日）。転写本は、平安時代にさかのぼる遺例が園城寺（国宝）および和歌山・西南院（重文）に伝わるが、本資料はもと近江国速水村（現在の長浜市中部）の曼荼羅堂に、いずれも重文である胎藏図像2巻（奈良国立博物館蔵）、胎藏旧図様1巻（個人蔵）、護摩壇様並三十七尊三昧耶形1巻（個人蔵）とともに伝わったもので、鎌倉初期の建久5年に園城寺の禪覚が書写し、後に円満院円浄が校勘を加えている一本である。台密系図像の古写本として貴重であり、また院政期に盛んになる由緒ある密教図像の転写と集積の実態を知る上で欠かせない資料である。



【彫刻】

2. かんしつこくうぞうぼさつはんかぞう 乾漆虚空蔵菩薩半跏像 こくうぞうどうあんち (虚空蔵堂安置)

1 軀

区分：重要文化財（明治42年4月20日指定）

種別：乾漆造／木心乾漆

法量：像高51.5cm

時代：奈良時代

虚空蔵求聞持法を請来したとされる道慈（?～744）ゆかりの額安寺に伝来し、同人の本尊と伝えられる虚空蔵菩薩像で、奈良時代後期に流行した木心乾漆造の技法により造られる。端正な造形から8世紀後半もさほど降らない頃の作とみられる。当初の台座を具備し、また光背や持物、表面彩色は叡尊（1201～90）の命により仏師善春らにより補われたことが光背裏面の弘安5年（1282）銘により知られるのも貴重である。



【工芸品】

3. せいはいくじうりがたすいちゆう 青白磁瓜形水注 一口

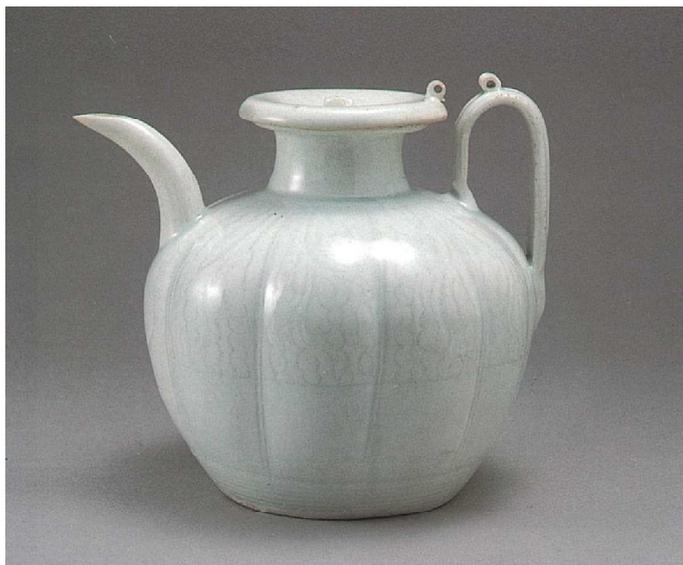
区分：重要文化財（昭和46年6月22日指定）

種別：陶磁器（中国）

法量：総高16.5cm 胴径15.1cm 蓋径8.1cm

時代：北宋時代 11～12世紀

純白の胎土に青味を帯びた釉薬が施された青白磁は、中国江西省景德鎮窯で北宋時代に完成された。縦に篋目を入れて瓜形に作った胴，先端が鋭く切られた伸びやかな注口などに，最盛期である北宋時代後期の作風がよくあらわれた代表作である。



4. 刀 めいはんけい 銘繁慶 1口

区分：重要文化財（昭和36年2月17日指定）

種別：刀剣

法量：刃長70.4cm 反り2.0cm

時代：桃山時代 17世紀

鑄造，中鋒で，反りの浅いいわゆる桃山時代の典型的な新刀の姿を示す。沸の厚くついた湾れ調の刃文に大板目肌がたち，地景が頻りに入った独特の鍛えが見所である。作者の繁慶は，元は三河出身の鉄砲鍛冶といわれ，彼独自の作風をよく示した代表的作品である。徳川義直の小姓下條某が家康より賜ったものと伝え，「下條繁慶」の号がある。



【古文書】

5. 太政官符 (宝亀三年五月廿日 / 大伴家持自署)

1 卷

区分：重要文化財（昭和34年6月27日指定）

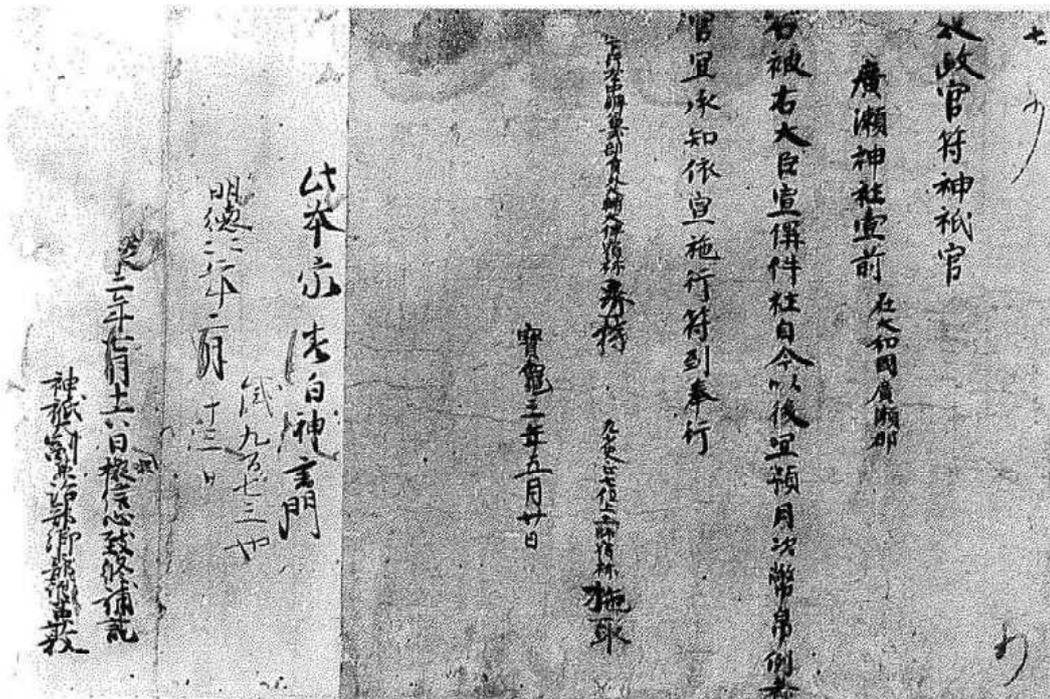
種別：古文書

法量：縦29.5cm 横53.7cm

時代：奈良時代

右大臣の宣より、大和国広瀬郡の広瀬神社を以後、月次班幣の例に入れることを神祇官に命じた太政官符である。紙面に外印（太政官印）二顆を捺している。広瀬神社は延喜神名式に、水の神としてみえる。

巻末に別紙が貼り継がれ、その奥書によれば、吉田家に早くより伝来したものであることが知られる。



6. 太政官符 (宝亀三年正月十三日／大伴家持自署)

1 幅

区分：重要文化財（昭和34年6月27日指定）

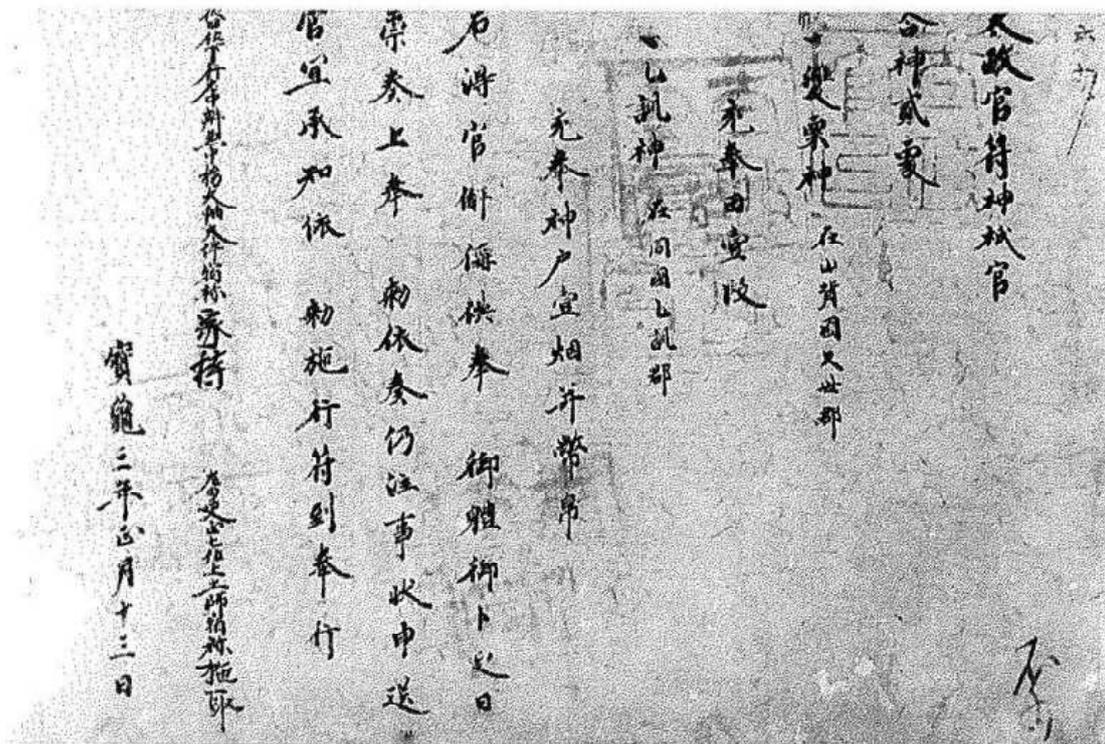
種別：古文書

法量：縦29.5cm 横43.5cm

時代：奈良時代

山背国久世郡の雙栗神に神田1段，乙訓郡の乙訓神に神戸1畑・幣帛を奉ることを神祇官に命じた太政官符である。紙面に外印（太政官印）七顆を捺している。

本文書において注目すべき点は，神祇行政に関係した稀有な文書であるのみならず、『続日本紀』などに所見を欠く史実を伝えていることである。また継目裏には「神祇官印」が確認でき，かつ代表的な万葉歌人である大伴家持の自署が見られる点で，歴史学・古文書学上において重要な文書である。



【書跡・典籍】

7. 医学書 ^{すうらんかんぼん} (崇蘭館本)

18件 (72冊)

区分：未指定文化財

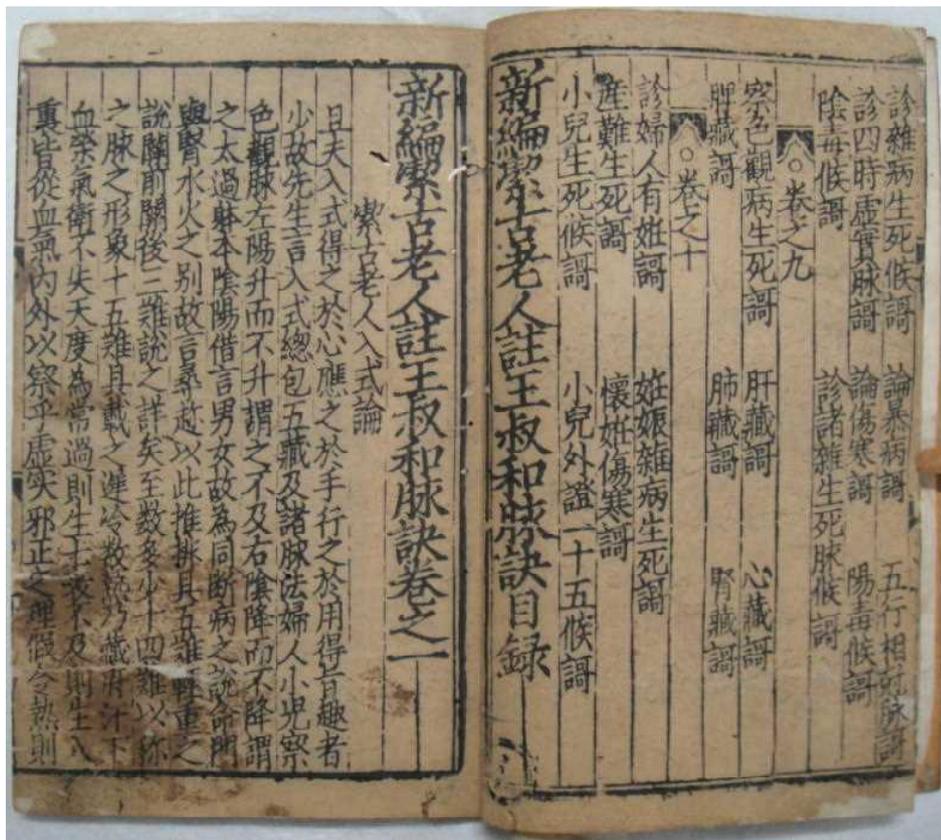
種別：書跡・典籍

時代：宋時代～明時代

典医であった京都の福井家に伝来した医学書のまとまりで、「崇蘭館本」として夙に知られている史料群である。

本史料群は、元版を中心とする中国版本からなる。なかには、南宋版をはじめとして、わが国にのみ伝存する稀覯本なども含まれている。

わが国における医学書受容のあり方、漢方・本草学などの東洋医学史、出版・印刷史、交流史などを研究する上で、まとまって伝来した数少ない医学書の史料群として極めて重要であり、国内外において高く評価されている。



【工芸技術資料】

8. 小千谷縮着尺 さざなみ立つ涼風 一点



越後上布・小千谷縮布技術保存協会 作
(重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」保持団体)
平成 27 年 (2015 年)

9. 小千谷縮着尺 蜻蛉返り 一点



越後上布・小千谷縮布技術保存協会 作
(重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」保持団体)
平成 27 年 (2015 年)

重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」の伝統的な制作工程は、すべて苧麻を手績みした糸を使用する、いざり機で織る、さらしは雪ざらしによる等、指定の要件に従った内容からなる。これらの技術は、雪国としてのこの地方の文化の特質を有するとともに、原料から加工技術の全般にわたって純粋に古法を伝えていて貴重な存在である。

共に重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」の指定の要件に沿った伝統的な技術による作品で、重要無形文化財保持団体の技術見本として伝承者養成事業等の参考となる優秀作品である。

(参考) 重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」指定の要件

- 一 すべて苧麻を手うみした糸を使用すること。
- 二 緋模様を付ける場合は、手くびりによること。
- 三 いざり機で織ること。
- 四 しぼとりをする場合は、湯もみ、足ぶみによること。
- 五 さらしは、雪ざらしによること。

10. 編込接合器「ひびき」 一点



家出 隆浩 作
平成 27 年 (2015 年)
第 62 回日本伝統工芸展
文部科学大臣賞受賞作品
縦 33.0cm 横 30.8cm
高 20.5cm

本作は、赤銅と四分一という二種類の合金をリボン状に加工して網代状に編み、それを銀蠟で流し固めて板状にし、金鍍で叩いて造形したものである。この技法は作者が独自に考案したもので、同人により「あやおりがね」と名付けられている。

作品に用いられたのは、厚さ 0.5mm、幅 2.3mm の赤銅、厚さ 0.5mm、幅 1.9mm の四分一である。それを網代編で平らに編み上げ、表面に銀蠟を流して網目の隙間を埋めて金属板にする。そして、その縁を落として丸く切り取り、金鍍で叩いて造形していく。器が打ちあがったところで表面を磨くと、余分な銀蠟が除かれて、四分一と赤銅の網目が表面に現れる。

作者独自の技術が遺憾なく発揮された、平成27年の第62回日本伝統工芸展における文部科学大臣賞受賞作品。

11. 乾漆葉盤「ゼラニウム」 一点



増村 紀一郎 作
(重要無形文化財「髹漆」保持者)
平成 28 年 (2016 年)
工芸技術記録映画対象作品
縦 34.7cm 横 35.6cm 高 5.3cm

作者の自宅で育つゼラニウムの葉に着想を得た作品。

素地の制作技法は、麻布や和紙を漆で貼り重ねる乾漆である。本作の素地は、粘土の原型をもとに作った石膏型に、美栖紙、布目の細かい麻布、粗い麻布を糊漆で貼り重ねて作られている。

上塗りは、高台内を除くほぼ全面に明るい色の朱を、口縁の内側にのみ濃い色の朱を配し、二色を塗り暈す。さらに、総体を高度な技術を要する朱の呂色仕上げとし、乾漆技法ならではの柔らかな曲線と曲面で構成された形態を際立たせている。

一見、簡素な造形のなかに、作者の得意とする髹漆の高い技術が込められた、平成 27 年度工芸技術記録映画「髹漆—増村紀一郎のわざ—」の対象作品。

12. 木目金花瓶 一点



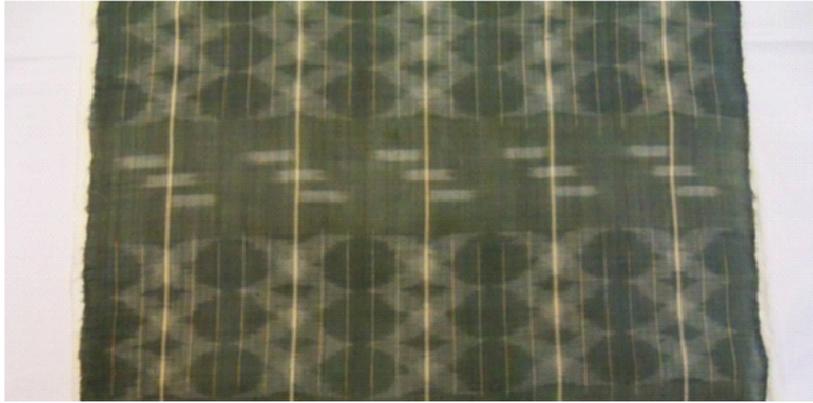
玉川 宣夫 作
(重要無形文化財「鍛金」保持者)
平成 27 年 (2015 年)
工芸技術記録映画対象作品
高 23.0cm 径 17.5cm

鍛金は、金属の展延性を利用し、金鏈かなづちや木槌きづちで打って器物を成形する技法である。本作に用いられた「木目金」は、作者が得意とする鍛金技法で、種類の異なる金属板を重ねて接合して叩き、金属の色彩の違いを活かして木目・斑状まだらの文様を打ち出す技法である。

本作に用いられた素材は、厚さ 2mm で 8cm 四方の銅，銀，赤銅の金属板 21 枚である。それらを融着した塊を円盤状の板に打ち延ばし、表面に鑿等たがねを用いて文様を彫った後、鍛金の技法で花瓶を造形した。彫跡を平らに叩き延ばす過程で、器の表面には銅（赤），銀（白），赤銅（黒）の三色の層で構成された細密な斑文はんもんが現れる。さらに本作は、器を打ち上げた後、器の表面に鑿を用いて凹凸を付け、矢絣状やがすりの鎚模様しのぎを全体に施して仕上げた。

平成 27 年度工芸技術記録映画「鍛金—玉川宣夫のわざ—」の対象作品。

13. 宮古上布みやこじょうふ着尺きやく 苧麻ちよま緑地りよくち経緯けいゐ緋ひ「草風」そうふう 一点



宮古上布保持団体 作
(重要無形文化財「宮古上布」保持団体)
平成 12 年 (2000 年)
幅 38.5cm 長 1,300cm

宮古上布は、沖縄県の宮古島に伝承される染織技法であり、苧麻の繊維を手續みした糸を用い、薄く軽い織物を製作するものである。17 世紀に人頭税として琉球王府への貢納布に定められて以来、技術が高度に発達したと考えられており、手續みの苧麻糸の使用、手括り緋、植物染料による染色、手織り等の伝統技法が今日に伝えられている。

本作は、福木の黄に藍を重ねて染めた緑色の地に、経緯の緋で風の揺らぎを抽象的に表現している。

宮古上布保持団体会員による、重要無形文化財「宮古上布」の指定の要件に沿った伝統的な技術による作品であり、その保持団体の技術見本として、伝承者養成事業等の参考となる優秀作品である。

(参考) 重要無形文化財「宮古上布」指定の要件

- 一 すべて苧麻を手紡ぎした糸を使用すること。
- 二 緋模様をつける場合は、伝統的な手ゆいによる技法又は手くくりによること。
- 三 染色は、純正植物染であること。
- 四 手織りであること。
- 五 洗濯（仕上げ加工）の場合は、木槌による手打を行い、使用する糊は、天然の材料を用いて調製すること。

【アイヌ文化関係資料】

1 4 . アイヌ文化関係民族資料 (計 37 点)

区分：未指定

時代：19～20 世紀

骨董商などを通じて収集されたコレクションで、木彫や刺繍など工芸的価値の高い資料が多く含まれる。明治ころのものと考えられるイタ（木盆）やマキリ（小刀）、イクパスイ（酒を捧げる儀礼具）には男性による精巧な彫刻が施され、エムシアツ（儀礼刀の提げ紐）は女性による編みの秀逸な技術である。中でも、アットウシ（木の内皮から作られた糸を織った生地^{ひも}に、木綿等の置布を縫い付けて刺繍を施した衣服）は、近世の探検家・医家の木村謙次（1752-1811）が 18 世紀末に北海道噴火湾地方で入手した衣服（木村家蔵）の刺繍の技術と類似しており、年代や地域を推測できる貴重な資料である。その他、いくつか制作者、収集者、年代等が分かる資料が含まれており、アイヌ文化の研究に寄与するところが大きい。



アットウシ



イタ



エムシアツ



マキリ

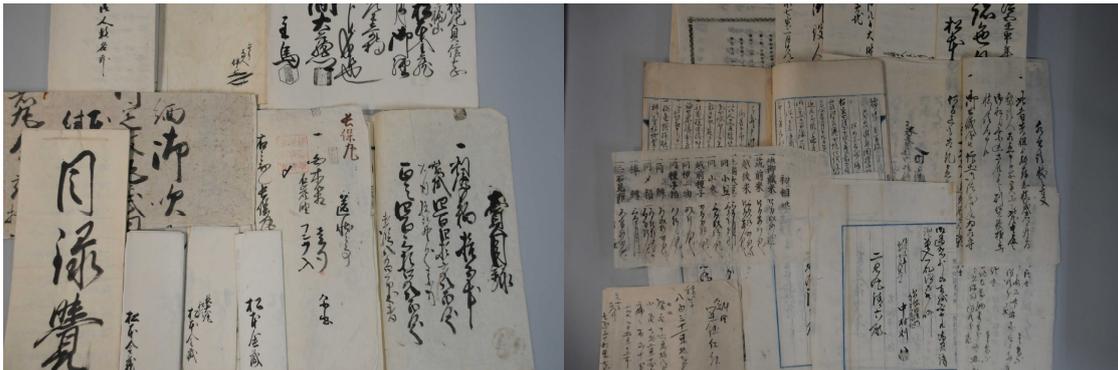
1 5 . アイヌ文化関係文書資料 (計 2 点)

① 松前松本家文書 27 点

区分：未指定

時代：19 世紀

天保より明治にかけて、松前藩の御用船・長者丸の船頭を務めた松本家旧蔵の文書群。松前藩の文書がほとんど残されていないことから、近世蝦夷地におけるアイヌの歴史や社会を知る上で重要な文書群である。



② ^{かえいしちとらどしきたえぞちえいこくじんきよこやごけんぶんごしんたつのおつし} 嘉永七寅年北蝦夷地江異人居小家御見分御進達之写 (江戸期) 1 冊

区分：未指定

時代：19 世紀 (幕末)

嘉永 7 (1854) 年、ロシア人が一時占拠していたサハリン南部クシュンコタン (現コルサコフ) において、ロシア人との応接や、ロシア側が建設したムラヴィヨフ哨所^{しょうじょ}に関する報告書。松本家文書旧蔵。樺太アイヌの居住地域にロシア軍が進駐した際の日本側の記録であり、日ロ関係史とアイヌの歴史を考えるうえで貴重な資料である。

